道徳的な女たらし
— ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 —

武田良材

1 モラリスト

1-1 モラルの作家ケステン

ヘルマン・ケステン(Hermann Kesten, 1900－1996)の名は、二十世紀ドイツ語文学に関わる文脈の随所に登場する。当然、彼のことをまるで知らないドイツ語文学の愛好家は、あまりいないけれども、ケステンをよく知っているという人は少ないに違いない。[1] そして、とりわけ作家としてのケステンについて論じられることは稀であったのだが、昨2003 年にケステンの代表作の一つである長編小説の『ニュルンベルクの双子』(*Die Zwillinge von Nürnberg*, 1947) が半世紀以上振りに再刊され、今年はドイツにおいてケステンについての論文集[2] の出版が予定されるなど、ケステン没後十年まであとほんの数年となった今、ケステンを巡る状況に変化が見られる。私としても、ケステン文学の魅力を明らかにすることをもって、その再評価を促したいと考えている。

ケステンは幼少の頃から青年期に至るまでニュルンベルクで暮らし、この都市を彼の故郷と認めていた。ニュルンベルクは革命的な都市で、例えばニコラウス・コペルニクスの『天体の回転について』の最初の出版地に選ばれている。ケステンのエッセイ集『辛抱強い革命家たち』(*Revolutionäre mit Geduld*, 1973)の序文によれば、ケステンはダントンとロベスピエールからレーニンとトロツキーに至るまで、革命的な人物たちに共感を持ちつつ成長したのであったが、1919 年のドイツ革命の失敗の際に、ニュルンベルクの地においても民衆が弾圧を受けて虐殺されたことに衝撃を受けた。彼はそうした犠牲を許容することができず、革命を拒絶する立場を選び取ることとなったのである。革命的なものへの共感は持ち続けながら、それでも暴力革命を拒

---

[1] ケステンの生地はガリチア地方の小都市だが、ニュルンベルクと記す人が多い。これはケステンが軽視されていることの一例である。*Deutsche Biographische Enzyklopädie* (Hrsg. v. Killy, Walter u. Vierhaus, Rudolf, München 1997) や *Lexikon der Deutschsprachigen Gegenwarts-Literatur seit 1945.* (Neu hrsg. v. Buchl, Marion u.a., München 1997) といった標準的文学辞典に全く同じ誤りが見られる。

[2] Hrsg. v. Fähnders, Walter u. Weber, Hendrik: *Dichter-Literator-Exilant, Über Hermann Kesten.* Bielefeld 2004.

絶するところから、ケステンは辛抱強い改良主義者となったと考えられる。

ファシズムは勿論のこと、レーニン的な暴力革命も支持できないケステンは、「モラル」を奉じる個人主義者であり続けた。彼の書く文章では幸福と善とモラルという言葉が頻繁に用いられる。ケステン文学の基礎には、他者を幸福にするために善を行うことがモラルであり、そうする人間がモラリストだ、という考えがある。そして、「現実を無条件に受け入れることと、理性の持つ浄化力を信じることと、言葉の力を通じて世界を改良しようという意志」[3] を統合したものが、新即物主義の作家として出発したケステンの立場だった。親友だったヨーゼフ・ロートやクラウス・マンらが、亡命生活の中で生命の火を燃え尽きさせていったことと比較するならば、言葉と人間理性へのケステンのこうした強い信頼は注目に値する。

ロートは左翼的な文芸欄作家として有名になった人であるが、晩年は君主主義者となったと言われることもある。けれども、ロートは沢山の仮面を被ったのだ、とケステンはそれを真っ向から否定している。ロートは「絶えず新たな幻滅を味わうモラリストの苦しみを抱いていた」、とケステンは評している。[4] 彼は小説でも、ロートを「大戦間期最大のオーストリアの詩人」[5] と讃えているほどで、そのことから、偉大な文学者はモラリストでなければならない、と考えていたことがわかる。同様にハインリヒ・マンとトーマス・マンについても、「二人は芸術家(Artist)として出発してモラリストとなった」[6] と語っている。

一方クラウス・マンは、とりわけ長編小説『火山』において、「言語による伝達可能性についての根本的な批判」[7] を行っているので、言葉の力を信頼するケステンとは違いがあるのだが、それにしてもマンは亡命を機会に、「反社会的な三文文士からモラリストへの変身」[8] を果たしている。とても親しい間柄でありながら、反ファシズム闘争の展望についてひどく懐疑的だったマンとは逆に、希望の込もった作品を書き続ける徹底したモラリストであったケステンの文学には、マン文学の限界の先を示しているところがあるのではないかと期待させられる。

この論文では、ケステンの描き出すモラリストをテーマに選んだ。なぜなら、ケステンは社会悪にモラリストを対置しているのだから、それこそが彼の文学世界の核となる部分と考えて間違

---

[3] Alker, Ernst: *Profile und Gestalten der deutschen Literatur nach 1914.* Hrsg. v. Thurnher, Eugen. Stuttgart 1977, S.255.

[4] Kesten, Hermann: *Vorwort zur Ausgabe von 1956.* In: *Joseph Roth Werke 1.* Hrsg. v. Hermann Kesten. Amsterdam 1975, S.13.

[5] *Die Zwillinge von Nürnberg.* Nürnberg 2003, S.514.

[6] *Revolutionäre mit Geduld.* S.265.

[7] Thurner, Christina: *Der andere Ort des Erzählens, Exil und Utopie in der Literatur deutscher Emigratinnen und Emigranten 1933-1945.* Köln 2003, S.187.

[8] Schmid, Arwed: *Exilwelten der 30er Jahre, Untersuchungen zu Klaus Manns Emigrationsromanen Flucht in den Norden und Der Vulkan, Roman unter Emigranten.* Würzburg 2003, S.17.

いないからである。モラリストを描くことが、ケステンにおいて、文学と社会をつなぐ試みだった。今回は、彼の描くモラリストを理解するために、決して無視あるいは誤解してはならない女たらしに注目し、その役割を解明する。ケステン文学の脇役[9] についての分析ではあるが、それをあらかじめ済ませておくことには大いに利点がある。

1-2 モラリストとは

その意味は曖昧なままに、日常的に用いられている「モラリスト」という言葉は、フランスで十八世紀後半から使われるようになったと言われる。古くはモンテーニュ、今ではアンドレ・グリュックスマンなどがモラリストと呼ばれる人たちである。モラリストの意味するところは、基本的には人間の生き方の探究者であって、特定の思想や認識の所有者に与えられる名称ではないため、モラリストたちに連続性や一貫性を見出すわけにはゆかない。それでも、共通な性質として、「人間は本質的にみなおなじであるという、人間の普遍性に対する確信」[10] を持っていることが挙げられる。

二十世紀に限ってみても、モラリストにはいくつかのタイプが存在するが、ヘルマン・ケステンはその中でも、哲学者アランことエミール・オーギュスト・シャルチェ(1868－1951)に近いタイプであると言える。すなわちケステンは、アランと同様に楽天家で、その楽天性は「可能性、それにとりわけ変革への意志に基づいている。」[11] それにまた、やはりアランと同様に、幸福を最重要視し、個人主義と自己愛の発展を肯定的に受け止め、「真の自己愛は利他主義に通ずる」[12] という考え方を基本としている。今は差し当たりこの程度の理解に留めておきたい。ケステンにおけるモラリストの具体的な中身は、テクストの分析を通じて次第に明らかにしてゆく。

1-3 性愛のモラル

ケステンの小説には、あまりにも魅力的な女たらしたちが登場している。彼らの性愛における大胆極まりない態度は、ケステン文学の評価を下げてきたと考えてよい。具体例を挙げると、『幸運児』(*Ein Sohn des Glücks*, 1956)の邦訳のあとがきで、訳者の小松太郎は、この小説が読者に向かって、モラリストであれ、と呼び掛けていることを確認しつつも、「とにかく愛慾のむなしさと滑稽さを感じさせて、一種淋しい、にがい、いやな、憂鬱な後味を残す作品である」[13]、と

---

9 小説の主人公として現われることもあるとはいえ、ケステンが中心的に描こうとしているものではないということ。

10 竹田篤司『モラリスト』(中央公論社 1978 年)

11 Zimmer, Robert: *Die europäischen Moralisten*. Hamburg 1999. S.144.

12 Ebd., S.145.

13 ヘルマン・ケステン『恋は皮肉』(小松太郎訳、講談社 1957 年)、252 頁。

彼自身の戸惑いを書き記している。そして彼のこうした解釈を反映させて、訳書のタイトルを敢えて『恋は皮肉』としている。すなわち、小松は主人公のガブリエル・アモロソを、「幸運児」と肯定的に受け止めることを拒否したのだが、それによってこの作品を皮肉な恋愛小説というたわいのなさそうなものとして紹介してしまっている。もう一つ紹介すると、『ゲルニカの子供たち』(*Die Kinder von Gernika*, 1939)の訳者の鈴木武樹は、その解説において、「(ケステンは)あたかも彼じしんの本能を裁くかのように、人間と生とをエロチックに愛する一連の人物たちを<中略>登場させている」[14] と書いている。鈴木にとってケステンの小説群に登場する女たらしたちは、裁かれるべき存在というわけなのだ。この二人の解釈は、ケステンの思想的背景を無視して、彼ら自身の道徳観に基づいて行われている。けれども、女たらしを一種のモラリストとみなすことも可能なのであって、そうした立場をとるならば、ケステンの描く女たらしを前に戸惑う必要はないのである。

モラリストを論じた人たちの中で、ケステンに最も大きな影響を与えたのは、哲学者のルートヴィヒ・フォイエルバッハ(Ludwig Feuerbach, 1804－1872)に違いない。というのも、フォイエルバッハはアルブレヒト・デューラーやハンス・ザックスと同じ墓地に葬られた、ケステンの「故郷」ニュルンベルクゆかりの有名人で、かつ、『キリスト教の本質』の著者として、ケステンの好きな革命的な人物でもあった。それどころか、ケステンは若いころ、フォイエルバッハが晩年を過ごした地の麓にあるルートヴィヒ・フォイエルバッハ通りに住んでいて、かつてフリードリヒ・ヘーゲルが校長を務めたメランヒトン・ギムナジウムの生徒でもあった。そうした身近さゆえに、ヘーゲル、フォイエルバッハの影響を受けたということは、ケステン自身が認めている。[15]

フォイエルバッハの主な仕事は、神が人間によって作り出されたことを指摘し、人間を神の位置にまで高めたことである。そのことから、ヘーゲルからカール・マルクスへの橋渡し役として高く評価されている。ただし、ヘーゲルとマルクスが人間の自己実現(主体と客体の統一)の手段として労働の弁証法にたどり着いたのに対し、フォイエルバッハの方は静態的世界に留まり続けた。[16] その結果、と言ってよいかと思うが、フォイエルバッハは恋愛を称揚し、モラルの最高形態の一つとみなしたのであった。[17]

---

[14] ヘルマン・ケステン『ゲルニカの子供たち』(鈴木武樹訳、白水社 1963 年)、266 頁。

[15] Kesten, Hermann: *Mit schüchternem Stolz und mit spätem Vergnügen*. In: *Unter uns: Hermann Kesten*. Hrsg. v. Ulf von Dewitz. Nürnberg 1996. 1980 年にニュルンベルクの名誉市民に選ばれた際のスピーチ。オンライン・テクストを参照した。

[16] 良知力『ヘーゲル左派と初期マルクス』(岩波書店 2001 年)、115～128 頁。

[17] これについては、フリードリヒ・エンゲルスが『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』第三章で批判している。

彼のモラル論については後述することにして、まずは先に紹介した『辛抱強い革命家たち』の一章をなすエッセイ『人類の代弁者ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』(*Ludwig Feuerbach, der Advokat des Menschen*, 1972)を紹介する。

フォイエルバッハの名は、法学で有名な父親と並んで、世界的によく知られてはいるのだが、マルクスとエンゲルスの影に隠れてしまい、『ドイツ・イデオロギー』や『フォイエルバッハについてのテーゼ』といったマルクス主義基本文献を通じて、否定的な印象を伴って理解されることが多い。ケステンはこのエッセイの中で、こうした状況に抗するかのように、フォイエルバッハを闘士として描き出している。ケステンが一番力を入れて叙述するのは、1848 年から翌年まで続けられたハイデルベルクでの講演である。それがフォイエルバッハが革命時期に行った唯一の目立った活動であり、彼がその後も大学教授になることのできない不遇の人生に甘んじたという意味で、彼が革命的に闘った証となるからである。加えてケステンは同じエッセイの中で二度も、フォイエルバッハが死の一年前にニュルンベルクの社会民主党に入党した事実を紹介している。そして締め括りにフォイエルバッハの『哲学の根本命題』からの引用として紹介するのが、「君の第一の義務は幸せになることだ。君が幸せならば、君は他人をも幸せにする」[18] という我と汝の思想に係わる箇所である。ケステンはここでフォイエルバッハが性愛についてどのように考えていたのかを紹介しているわけではないが、次に見るように、フォイエルバッハの思想において、性愛は我と汝の関わりの高度な形態と考えられていた。

フォイエルバッハの『唯心論と唯物論に関して』の中の「倫理学の原理」では、性愛とモラルについて論じられている。フォイエルバッハはイマヌエル・カントとの比較によって、自らの思想を解説する。モラルとは善を行うことなのだが、フォイエルバッハは善(Gute)と悪(Böse)、至福への欲求(Glückseligkeitstrieb)と義務(Pflicht)の四要素の関係について考察を加え、カントが『人倫(Sitte)の形而上学』において、「自己の至福の原理は退けられるべきである」[19] と述べて、人倫と至福を相容れないものとみなし、人倫をもっぱら義務と結びつけたことに反対している。フォイエルバッハは逆に、「善は至福への欲求の肯定、悪はそれの否定である」[20] として、自己の至福への欲求を肯定する。そして彼は愛について語り始める。なぜなら愛は、「他人の至福への欲求の満足によってしか、自分自身満足することのない人間の至福への欲求」[21] だからである。さらに、「愛の最も密接で完璧な形式は性的なものである。なぜならそこでは、無自覚にであろ

---

[18] *Revolutionäre mit Geduld*, S.256.
[19] Feuerbach, Ludwig: *Gesammelte Werke II*. Berlin 1990. S.79.
[20] Ebd., S.76.
[21] Ebd., S.77.

うとも、他人を幸せにすること抜きに、自分が幸せになることはあり得ないのだから」[22] とその思想を展開させる。こうして性交渉の内に愛の人倫が見出され、性愛がモラルの最高形態の一つと認識される。[23]

これから具体的に見てゆくが、ケステンの描く女たらしはこの種のモラリストである。しかし、性愛がモラルの一形態だとしても、社会派のケステンにおいて、愛人たちの間にしか現象し得ないモラルがどれほどの重要性を持ち得るというのだろうか？ そういう疑問を抱かずにはいられない。実際、ケステンの女たらしは、グロテスクに描写された矛盾に満ちた社会の中で、それを変革するような活動を果たし得ていない。にもかかわらず、ケステンの小説には、モラリストの女たらしたちが沢山登場し、読者に強烈な印象を与える。本稿では、一見したところ、作者自身の書く楽しみのためだけに登場しているかのようなこの種の人物が、実は、ケステンが読者に提示したかったモラリスト像を理解するための、重要な入口であることを確認する。

2 性愛のモラリスト

2-1 ケステンの描く女たらし

それでは、これからケステンの小説群に登場する一連の女たらしについて、具体的に検討してゆく。主に考察の対象とする登場人物は、『ヨーゼフは自由を求めている』(*Josef sucht die Freiheit*, 1927)から『ある堕落した人間』(*Ein ausschweifender Mensch*, 1929)、『幸福な人たち』(*Glückliche Menschen*, 1931)を経て『いかさま師』(*Der Scharlatan*, 1932)に至るヨーゼフ小説に登場するシュテファン・ロースと、『ゲルニカの子供たち』のパブロ・エスピノサと、『幸運児』のガブリエル・アモロソである。これからの話は、さらに『異教の神々』(*Die fremden Götter*, 1949)のエミール・コローブを取り巻く世界にもかなり当てはまるのだが、外れる点も少くはないため、話が繁雑になることを避けて、あまり言及しない。また、女たらしというだけであれば他にもいろいろ登場するが、ここで扱いたいのは、フォイエルバッハ的な意味でモラリストと呼び得る女たらしだけである。

それぞれ強烈な個性を持っている彼らを、登場人物の一タイプとしてその性格や役割についてまとめていく。その際に、必ずしも全員に共通する要素を取り出すわけではないことを、あらかじめ断っておく。ケステンはパターン化された物語を量産する作家ではないので、私たちが想像力を用いて根底にあるパターンを見出すよりほかないからである。結果としてこの人物タイプについて有用な理解に到達し得るなら、それでよいはずである。

先に小松太郎と鈴木武樹が訳書に添えた感想を、誤解の例として紹介したが、彼らなりの感想

---

[22] Ebd.
[23] Ebd., S.77f.

を抱いたのには理由がある。『幸運児』のガブリエルは、欧米各地に魅力的な愛人を抱える青年で、愛人の一人が彼の愛を逃した途端に飛び降り自殺してしまうという物語であるから、確かに滑稽でもあれば虚しくもある。『ゲルニカの子供たち』では、主人公カルロス少年の母の元恋人であるパブロ伯父が、伯父からすれば弟にあたる少年の父から彼女を取り戻し、さらに、その弟一家が家族付き合いしていた家族の母娘をたぶらかし、それに加えて、カルロス少年を保護してくれた夫婦の若い奥さんと駆け落ちしてしまう。それどころか、語り手の亡命ドイツ人作家までもが、かつて片想いした女性を彼にとられた思い出があるというのだから、まさしく罪深くエロチックな人間として描かれている。

けれども、ガブリエルやパブロ伯父を根本から否定するような解釈は、作者によって明確に示されている作品のテーマを無視することになってしまう。『幸運児』はそのタイトルの通り、モラリストになる素質を持った「幸運児」の物語だし、カルロス少年の不自然に長大な語りで知られる『ゲルニカの子供たち』も、子供たちを不自然なまでに成長させるきっかけとなった家庭崩壊は、スペイン市民戦争とゲルニカ爆撃という外因のみならず、パブロ伯父という内因にもよるのであるから、伯父は子供たちに対して重要な役割を果たしている。だから、自分を裁くという面は、例えあったとしても、あまり重要ではない。

2-2 ジャコモ・カサノーヴァ

これらの人物の理解において一歩先んじていたのは、ロココの時代に詳しい飯塚信雄である。彼はヘルマン・ケステンを紹介する文章の中で、『幸運児』からエーリヒ・ケストナーを連想したと述べたのに続けて、「けれどもこの物語は、もっとよく考えてみれば、あのカザノヴァを二十世紀の世界の中に投げ入れることによって展開される痛快な、あるいは憂鬱な奇蹟物語なのだろう」[24] と書いている。これはケステンの小説の中に、「カザノヴァ的人間像」の存在を認めた点で、小松太郎や鈴木武樹を超える重要な一歩を踏み出していたと言える。今では文学辞典の中で、『幸運児』がカサノーヴァ小説として紹介され、飯塚の発見した内容は常識となってしまっているのだが、とは言え、その次の一歩を踏み出した作品解釈は、未だ見当たらない。つまり、カサノーヴァ的人間像という規定が、シュテファン・ロースやパブロ・エスピノサにも適用できるという事実は見過ごされているようだ。けれども、彼らにカサノーヴァがパロディ化されていることを踏まえることで、ケステンの文学世界について、理解を大いに深められるのである。それを理解するには、まず、カサノーヴァとは何者かを知る必要がある。

ジャコモ・カサノーヴァ(Giacomo Casanova, 1725－1798)は有名な『回想録』(*Mémoires*)の

---

[24] ヘルマン・ケステン『現代ドイツ作家論』(飯塚信雄訳、理想社 1959 年)、286 頁。

著者で、カサノーヴァというその名が女たらしの代名詞というほどの偉人である。この人物をうまく評したものとしてシュテファン・ツヴァイクの書いた評論が知られている。ツヴァイクはドン・ファンとの比較でカサノーヴァの特徴をうまく浮かび上がらせている。ドン・ファンを「昂奮させるのは、ただ、女をはずかしめるという悪魔的行為だけ」[25] である一方、「カザノヴァに身をまかせた女たちは、彼を神様あつかいして、感謝している。なぜなら、彼は彼女たちの感情からなにひとつ奪わなかったばかりか、彼女らの『女』を傷つけずに、彼女らの生活に新らしい確信を与えてやったからだ」[26]、というように。ケステンのカサノーヴァ論もよく知られていて、中でも次の文章が、女性に尽すカサノーヴァの愛をうまく表現したものとして、しばしば引用される。

> カサノーヴァは自分の幸福を彼女の幸福で二倍にした。快楽における彼の算術に従って、彼が愛人に与えた快楽の中に、彼の快楽の五分の四を見出した。[27]

要するにカサノーヴァは女性を賛美し、女性を幸せにすることで自分を幸せにするタイプの女たらしである。このことから、清水正晴はカサノーヴァを聖者に見立ててさえいる。

> 彼はひたすらに彼女たちを賛美し憧憬します。彼の愛の行為は、欲望の満足であるとともに生命の燃焼であり、それは相手と合体してひとつの世界をきずきあげることによって、はじめて完成するものです。[28]

以上のように、カサノーヴァは正しくフォイエルバッハが讃えた性愛によるモラルを体現した人物であったと言える。

『回想録』第七巻第十章には、カサノーヴァが昔の愛人と彼女に生ませた娘の三人で、快楽を味わう様子が描かれている。ケステンの小説の中でもこれに近い人間関係が描かれている。すなはち、『いかさま師』の中でロースは、血縁関係にある姪を愛人にするばかりか、彼女の娘と結婚する。このこと一つをとっても、ロースとカサノーヴァの間にかなりの類縁性が存在することがわかる。だが、具体的な照応よりも、ケステンの女たらしたちが目の前の女性の虜となり、打算抜きに惚れ込んでしまうところに、彼らのカサノーヴァ性を見てもらいたい。『ゲルニカの子

---

[25] シュテファン・ツヴァイク『ツヴァイク全集 10』(吉田正己他訳、みすず書房 1974 年)、81 頁。
[26] 前掲書、83 頁。
[27] Kesten, Hermann: *Casanova*. Frankfurt am Main; Berlin; Wien 1981. S.88.
[28] 清水正晴『《聖者》カザノヴァの肖像』(現代書館 2000 年)、445 頁。

供たち』のパブロは、今まで愛し合っていた女性のことをすっかり忘れてしまったかのように新しい女性に惚れ込む。『異教の神々』のコローブは、小娘一人手に入れるために消防車を持ち出して、大騒動を起こす。『幸運児』のガブリエルは、各地に散らばる愛人たちの一人ひとりを、真剣に愛している。そうした後先考えない全力の愛こそ、カサノーヴァ的人物を表わす印である。

2-3 カサノーヴァ小説[29]

ここから先は、「『カザノヴァ回想録』のヒロインの一人ルクレチアとその夫の弁護士をモデルにしたと思われる小説『幸運児』」[30] を中心に考えてゆく。それはカサノーヴァ的人物が基本的には名脇役である中で、『幸運児』のガブリエルだけが主人公として描かれていて、このタイプの人物の性質がもっともわかり易いからである。

ガブリエルとモラルの結びつきを見てみよう。ガブリエルは自らモラリストと称したり、モラリストとなる素質を持っているという確信を述べたり、モラリストになろうとしている、あるいはそれが使命だと表明したりしている。モラルへの言及は実に多い。

> 「私はモラリストです。それが私の不幸なんです。私は自分が善人であることを当然以前から知っています。誰がそうでないでしょうか？ けれども私は主義を持って、それに従って生きなければならないんです。そうでないと堕落しますよ、主義のない世界ではね。私は何がなんでも正しく生きようとして、そして全てを誤っているのです。私はいつも新たに始めなければなりません。そうでないと私は犯罪者に終わります。」[S.9]

このガブリエルの告白は内容が豊富である。モラリストであることと、人間の善良さへの信仰、主義をもって正しく生きる意志と、その困難さの自覚とが述べられている。

この小説のテーマがモラルであることの証拠に、ガブリエルがモラルに言及している箇所をさらにいくつか引用しておく。

---

29 これ以後、次の本からの引用はページ数を[ ]で囲んで示すのみとする。Kesten, Hermann: *Ein Sohn des Glücks*. Frankfurt am Main; Berlin; Wien 1981.

30 飯塚信雄『カザノヴァを愛した女たち』(新潮社 1994年)、233頁。『幸運児』の中にはドン・ファンとカサノーヴァへの言及が数多く見られ、ガブリエルがカサノーヴァのタイプであることを教えているかのようである。「本の印刷をなさってるんですか？ 何を印刷してるんです？ カサノーヴァの回想録ですか？」[S.108]「ドン・ファンは結婚しません。カサノーヴァは戻ってきたところで一晩か二晩だけです。ガブリエル・アモロソ氏はドン・ファンやカサノーヴァと似たり寄ったりですよ。」[S.231]「ドン・ファンならば彼女を彼女をものにして旅立っただろう。カサノーヴァならばものにして五日か五週間かしっかりつかまえていただろう。」[S.234]

「(私の使命は) モラルある人生を送ること、自分で自分を尊敬せずにはいられないような人間になることです。」[S.102]

「私は個人的な特徴を一つしか持っていない。それはモラリストになる素質だ。これには確実になれる。まともな人間になれる。ただし、それはとても難しい。この世ではモラリストになる機会よりも、自分自身やモラルやその他のものと妥協してしまう機会のほうがはるかに多い。モラリストになるとは、倫理的な計算で善を行うことであって、善と自分自身においてモラルを満足させること以外の、何ものも得ることなしにそれを行うことである。」[S.193]

「ある時はああしたり、またある時はこうしたりしてきた。けれども私には一つしか才能がないんだ。モラリストになる才能しか。私には、まともな人間になるという、ただ一つの意図しかない。目標はただ一つ、平穏な生活を送ることなんだ。私は素朴な心を持っているのだよ。」[S.263]

彼はとても誠実な人間で、モラリストを目指しているのである。

彼は個人主義者なりの政治活動を展開する。すなはち、共産党書記長、ド・ゴール派、大工業家、社会党議員、歯科医、学生など種々雑多な人間を集めて、「あらゆる政党、世代、利害関係、民族を横に貫く、流血と自由の剥奪のない、断乎たる世界改造家のグループ」[S.172] のまとめ役になろうとする。彼は戦争や革命ではなく、「複数の秘密結社によって、ある政治的な小さな混乱によって、個人、労働組合、財団法人、団体、政府、独裁機関との交渉によって」[S.169] 社会を変えようとしている。こうした姿勢からして、彼は確かに世間的な意味でのモラリストであるようだ。

けれども、彼の告白や政治活動に基づいてそう判断するのには大いに問題がある。なぜなら、彼は恋愛の方に大部分の時間と労力を注いでいて、政治活動は片手間にやっているようにしか見えないのに加え、『回想録』のルクレチアあたるらしいクレリアの夫で、弁護士のエミリオ・ロンダーノは、ガブリエルが政治的なことに関わっていることなど予想もできない段階で、彼をモラリストと認め、絶賛したのだから。妻を寝取られたエミリオは、ガブリエルを憎んでしかるべき立場にあるがゆえに、愛人たちにはない説得力をもって、ガブリエルの偉大さを保証する役割を担わされている。

ガブリエルと知り合ったエミリオの興奮はとてつもなく大きい。遺書の中では、彼を救世主扱

いするほどである。

「君は幸運児だ。私はそれを君から感じた。君は神の子だ、君をみつめる全てのものにとって快楽であり喜びでなのだ。」[S.45]

そしてさらに、「きみはぼくの魂を救済してくれた」[S.47]、と感謝を述べている。繰り返すが、この時点ではガブリエルの政治活動のことなど知らない。エミリオにとってガブリエルは、妻の不倫相手で、女たちを魅了する好青年でしかない。つまり、エミリオの興奮は、フォイエルバッハの説いた性愛のモラルによってこそ、理解し得る性質のものなのである。

ガブリエルは相手をとっかえひっかえ性交渉を繰り返す。そうする中でも、いつも相手の女性を真剣に愛し、彼女らを幸せにしようとしている。打算のないこうした姿勢こそ、エミリオを圧倒してしまった、ガブリエルに備わるモラルである。エミリオの考えによると、もしガブリエルが異性であったならば、肉体的に惚れ込んでしまって、彼の「神のような性格を感じ損な」[S.45f]ってしまったことだろう。実際、女たちはエミリオのように深く精神的に、ガブリエルを理解することはない。一見したところ男女の恋愛を描いたこの作品は、実のところ男たちの物語となっている。

ガブリエルの登場とともに、エミリオには決定的な破産が突き付けられる。エミリオには妻クレリアを満足させられないことが明白となり、さらに、彼独特の秘密を作らないという夫婦の間のルールをもってしても、不倫相手に対する嫉妬に耐えられず、自殺寸前にまで追い詰められてしまう。彼はそうした敗北感に満たされて、ガブリエルに羨望の目差しを送る。エミリオには到達し得なかった高みに立つガブリエルは、人間の可能性を身をもって示す存在として、救世主にも値する。この小説では、ガブリエルの性愛のモラリストぶりが重要なのであって、個々の恋愛にまつわるエピソードが重要なのではない。だから、これを恋愛小説と規定するのは妥当でない。

2-4 カサノーヴァ的な女たらし

エミリオの受けた衝撃を理解するために、もう一つ考えておくべきことがある。今確認したように、ガブリエルは性愛のモラリストだが、エミリオは同じものを目指していたわけではない。エミリオの試みとして具体的に明らかになっているのは、妻クレリアとの間に全く秘密を作らないで、全てをさらけ出すことである。現代社会にあってそれは困難な試みで、そのためエミリオは、夜中の妻との戯れが真実の生活で、昼間の仕事は茶番に過ぎない、と常識を逆転させる。彼はそのように理性で自分を縛ることによって、善良な人間であろうと努力している。逆にガブリエルの方は感性に従って生きていて、社交を偽りとみなすエミリオの考え方には同意しない。こ

の二人は、禁欲主義者と快楽主義者のようなもので、一見全然別もののようでありながら、幸福を目指して自らをコントロールしている点でそっくりである。

『幸運児』はモラリストを目指す人たちを描いた小説に他ならない。表向きの主人公ガブリエルは、物語の最初と最後で基本的に何も変わっていないように見える。彼が最初にクレリアを愛していたようにベアーテを愛している姿が描かれてこの物語は終わる。この作品の中で起きた悲喜劇を胸でしっかり受けとめたのは、ガブリエルに惚れた女たちではなく、エミリオ・ロンダーノとエットーレ・カセッラの二人である。要するにこれは、モラリストのガブリエルと、モラリストになるのに失敗したエミリオと、これからモラリストになることに挑戦するエットーレ少年の三者を中心にした物語で、ガブリエルからモラリストとは何かを学ぶエミリオとエットーレこそが影の主人公である。

エミリオの役割はガブリエルの卓越性を客観的に示すことである。彼は妻クレリアがガブリエルのせいで自殺してもなお、ガブリエルを心から絶賛する。彼のことを幸運児だと繰り返し、「彼は勿論正しい。彼は実際にモラリストになるためのあらゆる素質を持っている。善人に、勿論幸運でもってそうなる可能性があるんだ。」[S.253] と弁護するのである。妻の死の原因であるよりも、まずは、人がモラリストとなる可能性を身をもって示してくれた、というわけだ。

若く未来ある、つまりまだモラリストになる可能性があるエットーレ少年にとっては少し事情は違うが、早熟で賢いエットーレもガブリエルから人間の可能性を学んでいる。

> 「僕が今まで会った人たちの中で、最も素敵な人たちの一人だとあなたのことを思っています。[. .] 誰をも愛すことが出来るのは大変な幸福に違いありません。それもあなたのようにすぐに愛されるというのは。」[S.71]

エットーレはエミリオに比べて目立たないが、ヨーゼフ・バールやカルロス・エスピノサなど、この歳頃の若者がケステン文学の主人公に多いこと、逆にガブリエルのような人物は脇役に過ぎないことを考慮に入れるならば、この少年の反応を無視するわけにいかない。

エミリオの目指したもの、エットーレの目指すものは決して女たらしなどではない。二人はただ善良でありたいのだ。ガブリエルは幸運にも人を愛し愛される才能に恵まれていて、人を幸せにすると同時に自分も幸せになることがきるモラリストである。ガブリエルというモラリストと出会うことでエミリオとエットーレに発展の可能性が与えられるということがこの作品の中身で、その意味でこれは「幸運児」の物語なのである。

前のような見方はヨーゼフ小説にも適用できる。自由を求めていたヨーゼフ少年は、かつて自分と同じように自由を求めながら、今では妥協を肯定するようになった父親を否定し、カサノー

ヴァ的女たらしのロース叔父に支えられて断固たるジャーナリスト、つまりモラリストへと成長を遂げる。その完結編といえる『いかさま師』で、ヨーゼフの亡命を手助けした仲間たちが互いに「いかさま師」と呼び合う場面があるが、「いかさま師」とはシュテファン・ツヴァイクが彼のカサノーヴァ論で第一行目から使った規定である。[31] ヨーゼフは仲間たちによって「真のいかさま師」と認められる。つまり、ヨーゼフはカサノーヴァ的なモラリストの延長線上にあるモラリストである。

ところが、ケステンに関する論文としては比較的新しいHans Wagener によるヨーゼフ小説論[32] では、ケステンが何をパロディ化しているかを沢山具体的に指摘しているのだが、カサノーヴァへの言及は全くない。そこが現在のケステン研究の限界であり、カサノーヴァ的人物という概念を用いてケステンの長編小説群を読み解くことで、より整合性のとれた解釈を展開させることができる。それが本稿をもって指摘したいことである。

カサノーヴァ的人物は、モラル的な生き方の手本を示し、ときには直接救いの手を差し延べて、少年をモラリストへと成長させる触媒として機能している、と要約できる。そうした役割こそがまさに、ケステンの文学作品に女たらしが登場する意味なのである。

3 モラリストとカサノーヴァ的人物

3-1 子どもと大人

ここから先は、モラリストを目指す若者と、モラリストを目指す過程で挫折した人物と、カサノーヴァ的人物、この三者の関係を検討する。ここではカサノーヴァ的人物という概念によって浮かび上がってくるものを指摘するにとどめる。詳しい分析は別の論考で展開させる予定である。

『幸運児』に注目してきたので、エミリオとエットーレの関係について考えたいのだが、むしろヨーゼフとオイゲン・バール、カルロスとアントニオ・エスピノサの二組について先に考えたほうがわかり易い。この二組は息子と実の父親の組み合わせである。その共通性は、思慮深い息子に尊敬されていた立派な父親が決定的な破綻に直面するところにある。自由を求めていたのに妥協することを自らに許してしまったオイゲンは、社会民主党の国会議員として戦時公債を承認するところまで堕落する。妻に捨てられたアントニオは、その直後にかのゲルニカ爆撃で命を落とす。エミリオついては繰り返すまでもない。エミリオとエットーレは親子ではないけれども、ロンダーノ家とカセッラ家との家族付き合いを考えれば、それに近い関係にあると言える。息子

---

31 ちなみにツヴァイクは同じエッセイで、カサノーヴァについて幸運児という規定も用いている。

32 Wagener, Hans: *Mit Vernunft und Humanität, Hermann Kestens sachliche Denkspiele in seinen Josef-Romanen.* In: *Neue Sachlichkeit im Roman.* Hrsg. v. Bercker, Sabina u. Weiss, Christoph, Stuttgart 1995, S.49-68.

と父親の関係は次のようにまとめられる。モラリストを目指した父親は、一見したところ善良な人格者となることには成功するのだが、息子の目の前で劇的に破綻してゆく。

ヨーゼフにしてもエットーレにしても、愚かな大人たちへの嫌悪と、自分たちもまた大人に成長して、自分たちが嫌悪しているものと同じものになる可能性への恐怖を抱いている。モラリストになるのに失敗した大人たちは、この少年たちの最も蓋然性の高い将来の姿を現前させていると言える。少年が大人に成長するとともに妥協に身を委てゆく、という状況に風穴を開けるがごとく登場するのがカサノーヴァ的人物である。彼らは外見上は大人だが、その精神は若々しくて、子どもと大人の中間に立つ。例えば、エットーレはガブリエルが大人の世界に完全に属しているとは考えていないし、ガブリエルの方もエットーレに向かって、「我々はまるで兄弟みたいに沢山共通するところがある、そのように私には思えるよ」[S.80] と語るように、大人が子どもに対するような態度はとらない。エミリオはガブリエル宛の遺書に書いている、「私が自分を売らず、自分を見捨てなかったとしたら、あらゆる妥協に十本の指全てを差し出さなかったとしたら、私はどうなり得たのかわかるよ。殆ど君のようになっていただろう」[S.45] と。つまり子どもの純粋さを保ち続けていたならば、殆どガブリエルのようになっていたはずである。ガブリエルにはそうした若さがある。そのモデルとなったカサノーヴァ自身がヴォルテールに向かって、「わたしは全人類の若者でありたい」[33]、と語ったと書いているのだから、カサノーヴァ的人物は本質的に若者の味方なのである。

人格者に見えた父親の破綻は、その息子に大人への嫌悪を再確認させる。そしてその破綻の原因として登場してくるカサノーヴァ的人物は、子どものように純粋であり続けているという意味で、父親を超えた存在なのである。

3-2 教育熱心な父親

子どもたちの目から見れば醜悪な大人に属する父親たちも、かつては未来のモラリストたる子どもたちと同じように、情熱を持った少年だった。オイゲンはヨーゼフが自分そっくりなことに感激している。

> 「父さんはなぜそう悪いの？」
> そのとき父親は理解した。彼は少年を見た、彼の少年を。私の子だ、と彼は固く信じた。[...] 父親は少年の輝く目を見た。ブラヴォー、と彼は思った。ブラヴォー、君には炎がある、けれども…ああ、と彼は思った。彼は悩んだ。それでもこいつを助けて

[33] 『カザノヴァ回想録３』(窪田般彌訳、河出書房 1968)、364 頁。

はやれる、こいつは切に私に頼っている、私に期待している、私たちが互いに悩んでいるのを見るときに互いに助け合うということがとても困難なこと、大抵において殆ど不可能だということを、こいつは今日のところはまだ知らなくてよい。[S.51]

父親たちは少年の純粋さを失ってはいるが、今も善くあろうとする意志と、子どもたちへの理解と、教育への熱意を持っている。アントニオは子どもたちに議論をさせる。エミリオは子どもにではなく、妻に対して教育熱心なようだが、エットーレに関しては、この場合エミリオではなく実父ジャコモ・カセッラで考えるとよい。彼は息子に対して何も隠さないという教育をしている。彼らに共通する特徴は、子どもたちを一人前の人間として、つまり大人と差をつけることなく扱っていることである。こうした父親たちがいて、その教育の影響からモラリストになる素質を持った少年たちが出てくる。その意味で、彼らは少年たちの父親としての役割を十分に果たしている。

3-3 家庭崩壊

カサノーヴァ的人物の登場は家庭崩壊の引き金となる。ロース叔父とティンカの間の秘密を知りたいと思ったヨーゼフは、それまで安心して身を委ねてきた家族の、醜悪な姿を目の当たりにしてしまうし、ロース叔父のせいでティンカは自殺に追い込まれる。パブロ伯父は弟からその妻を奪ってしまう。ガブリエルについては繰り返すまでもない。彼らは秩序の破壊者である。カサノーヴァ的人物の介入がなかったならば、ヨーゼフは父親を愛しつつ、母親の下で成人したのかもしれない。アントニオは子どもたちからも世間からも尊敬を集める父親であり続けたのかもしれない。ロンダーノ夫妻はおしどり夫婦であり続け、カセッラ夫妻もこれまで通りであり続けたのかもしれない。けれどもカサノーヴァ的人物の登場と共に、実はモラリストになり切れていなかった大人たちの化けの皮が剥がされ、同時に、未来のモラリストを優しく包み込んでいた家庭という繭が崩れ落ちて、子どもという存在から抜け出すようせまられる。

彼らは一足飛びに大人になるわけではないが、ヨーゼフにしてもカルロスにしてもエットーレにしても、子どもと大人の中間段階に立つことになる。トーマス・マンがカルロスの長大な語りに対して行った解釈を思い起こすとよい。トーマス・マンは、カルロスの少年らしからぬ、そして作者ケステンに似て大人びた語りに文句を付けてみせた上で、スペイン市民戦争とその中で行われたゲルニカ爆撃を目撃した結果、「これら全てが彼の幼い魂に襲いかかり、無理矢理それを異常なまでに成熟させてしまった」[34]、と説明している。『ゲルニカの子供たち』という作品にお

[34] Mann, Thomas: *Politische Schriften und Reden 3.* Frankfurt am Main 1968, S.353.

いて家庭崩壊と戦争とが一体のものであることを考慮に入れるならば、この押し進められた成熟が、家庭崩壊の結果でもあることは明らかである。この女たらしたちの引き起こす悲劇は、表面的にはモラリストに見えた父親たちのごまかしを白日の下に晒し、少年たちに大人に向けて飛躍するきっかけを与える、という意味において生産的なものだと言える。

3-4 二人の父親

すでに述べたように、強引なところもあるが、モラリストになれなかった人物と未来のモラリストとは、父親とその子という関係になっている。前者がカサノーヴァ的人物に敗北し、その立場をのっとられることで、新しい家族めいた関係が形成される。ロース叔父とコンスタンティーネとヨーゼフ、パブロ叔父とピアとカルロス、ガブリエルとジュリアとエットーレというように、カサノーヴァ的人物と実の母子という擬似家族が生じる。ここでは母親のことはどうでもよい。私の指摘したいのは、カサノーヴァ的人物は未来のモラリストの前に、新しい父親として立ち現れる、ということである。

すなわち未来のモラリストは二人の父親を持つ。教育熱心な古い父親と、恋愛に生きる新しい父親とは全然別種の人間に見えなくもない。けれども、オイゲンとロース叔父とが義理の兄弟、アントニオとパブロ伯父とが実の兄弟であるのに加え、エミリオはガブリエルに向かって、「私は君を兄弟のように、人類の理想像のように愛している」[S.18] と言っている。つまり彼らは兄弟あるいはそのようなものとして描かれている。彼らは自分たちの主義を固持して世間から浮いてしまっている仲間どうしであると同時に、独自の生き方を貫こうとする主義を持った人間である。そしてそれゆえ必然的に個人主義者である。兄弟のように近しい存在であるからこそ、彼らの対立は激しく、その対立点が極めて明確となっている。古い方の父親は自らを理性で縛ることでモラリストを目指して破綻するが、新しい父親は恋愛に生きるモラリストとして成功している。前者は社会に貢献し得る人物だが、モラリストには到達していない。後者はモラリストではあるが、空想的で政治面では期待できない。この二人を父親にすることで、未来のモラリストは政治的なモラリストへと成長する可能性を持つ。実際、『いかさま師』でのヨーゼフはそれになりつつあるように見える。ケステンの小説の多くで女たらしが暴れ回り、家庭が決定的な破綻に見舞われることの意味は、そこにある。

4 おわりに

今回はケステン文学におけるカサノーヴァ的な人物の役割を解明した。この人物は未来のモラリストたる少年を保護している殻を割って、少年の成長を促すと同時に、モラリストの独特な手本を身をもって示している。ある一面においては立派だがモラリストになることには挫折した父

親たちの、その限界を補っている存在と言える。

以上のようにカサノーヴァ的人物はモラリストを生み出す一契機となっている。なくてならない存在ではなくて、代表作の中にもこの種の人物が登場しないものがあるとはいえ、モラリストを描き出すケステンの文学世界の中で、無視しがたい位置を占めている。また、この人物の肯定的役割を見落として、単なる破廉恥な女たらしとみなしてしまうならば、ケステンを過小評価することになる。そういうわけで、女たらしを論じることも、ケステン文学全体を考える上で有意義だと判断した。女たらしすらもモラリストを志向しているという事実は、ケステンのモラルの徹底性を物語るものであり、ケステンについて考えてゆく上で、前提として踏まえておかなければならない。

さて、ケステン文学におけるモラリストのあり様を解明するためには、視点をヨーゼフ・バールに代表される政治的なモラリストへと成長してゆく人物や、『ニュルンベルクの双子』のウーリのような完成されたモラリストへと移す必要がある。それが次回以降の課題である。

Die Moral eines Verführers
— Moralisten in der Literatur Hermann Kestens —

YOSHIKI Takeda

Das Thema dieser Arbeit ist die Figur des Verführers, die mehrfach in den Werke Hermann Kestens erscheint. Es wird allgemein angenommen, dass sie negativ charakterisiert ist, aber die Verführer spielen eine große positive Rolle.

Der Theorie Ludwig Feuerbachs nach ist die Geschlechtsliebe eine der höchsten Formen der Moral. Ein Verführer kann also durchaus ein Moralist sein, und Jacomo Casanova, dessen Biographie Kesten verfaßt hatte, ist ein solcher Moralist, denn, wie Stefan Zweig gesagt hatte, im Gegensatz zu Don Juan liebte und diente er einer Vielzahl von Frauen.

Kesten hatte seinen Casanova-Roman, „ein Sohn des Glücks" im Jahre 1956 geschrieben. Der verführerische Protagonist dieses Romans zielt darauf, zum Moralisten zu werden, ja, ist nach Meinung seines Freundes schon ein Solcher. In dieser Arbeit ergibt sich durch die Forschung in seinem Casanova-Roman die Funktion der Casanova-Gestalt, dass sie den auf Moralisten vergebens gezielten Menschen und den auf denselben zielenden Menschen eine Möglichkeit zeigt, Moralist zu werden. Der Verführer ist ein Katalysator, der einen Jungen zum Moralisten entwickelt.

Dies zeigt sich Z.B. bei Josef Bar und Stefan Roß in den Josef-Romanen (1927, 1929, 1931, 1932), und Carlos und Pablo Espinosa in „die Kinder von Gernika" (1939). Eine der beiden Personen ist ein Casanova-ähnlicher Weiberheld und der andere ein auf Moralist zielender, frühreifer Junge, wie Gabriel Amoroso und Ettore Casella in „ein Sohn des Glücks". Diese Jungen haben ihre ehrlichen Väter, aber an deren Stelle treten die Casanova-Gestalten. Diese Familientragödien wirken stark auf die Jungen und lassen sie erwachsen und zu moralischen Männern werden. Auf diese Weise spielen die Verführern in Kestens Romanen zwei wichtige Rollen: Sie sind ein Vorbild der Moralisten und eine Reizfigur.

Der zukunftreiche Junge hat zwei vaterähnliche Personen, von denen die eine vernünftig und moralisch ist, die andere sensuell und moralisch. Ihm bezieht sich also die große Möglichkeit, ein vernünftiger Moralist zu werden. Um die Moralität Hermann Kestens ganz zu verstehen, ist es unerläßlich, seine anziehenden, sinnlichen Personen nicht geringzuachten, weil Kesten ganz und gar moralisch war.